

富士宮市文化財調査報告書 第37集

丸塚 遺跡

—静岡県東部農業共済組合事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

富士宮市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成18年12月18日から平成19年1月12日まで現地調査を実施した静岡県富士宮市杉田1230番地の1に所在する丸塚遺跡発掘調査報告書である。

2. 調査は静岡県東部農業共済組合より依頼を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、富士宮市教育委員会が実施した。

3. 調査期間及び調査体制は以下のとおりである。

調査期間 平成18年12月18日～平成19年6月30日

調査面積 約100m²

調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 大森 衛

調査担当者 富士宮市教育委員会 文化課 主幹兼係長 馬飼野行雄

同 学芸員 渡井英誓

同 瞠託員 澤柳幸司

調査補助員 斎藤之弘、渋谷政夫、堤 健一、古郡善明、渡辺 剛、
大平美奈子、山崎英美子、渡辺成子

整理作業員 渡辺麻里

4. 本書の執筆及び編集は澤柳が行った。

5. 発掘調査及び報告書作成・執筆に当たっては下記の機関、次の方々のご教示やご協力賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。(敬称略)

池谷信之、植松章八、小崎 晋、高尾好之、前田勝己、静岡県東部農業共済組合、駿豆建設株式会社、ひらした測量建設事務所

6. 発掘調査資料はすべて富士宮市教育委員会で保管している。

凡　　例

本書記述については以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 本書に使用した地図は富士宮市役所発行のものである。

2. 欠落している遺物取り上げ番号については、取り上げ後に遺物であると認めることができず、取り除いたものおよび、報告書に記載していないものである。

3. 土層・遺物観察は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局)を用いた。

4. 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

縄文土器：1/3 石器：1/1、1/3

5. 写真図版中に記載されている遺物番号については、表中、挿図中の遺物番号と統一している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 環 境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 層 序	3
第Ⅲ章 調査の成果	7
第1節 調査の経緯	7
第2節 遺 構	7
第3節 遺 物	14
第Ⅳ章 おわりに	21

挿 図 目 次

第1図 富士宮市地質概略図	1
第2図 丸塚遺跡と周辺遺跡	4
第3図 調査区土層図	5
第4図 調査区設定図	8
第5図 土 坑	9
第6図 ピ ッ ト	9
第7図 2~8T遺物出土状況図	10
第8図 9~14T遺物出土状況図	11
第9図 15T遺物出土状況図	12
第10図 確認調査遺物出土状況図	13
第11図 本調査出土遺物①	15
第12図 本調査出土遺物②	16
第13図 本調査出土遺物③	17
第14図 確認調査出土遺物	19

挿 表 目 次

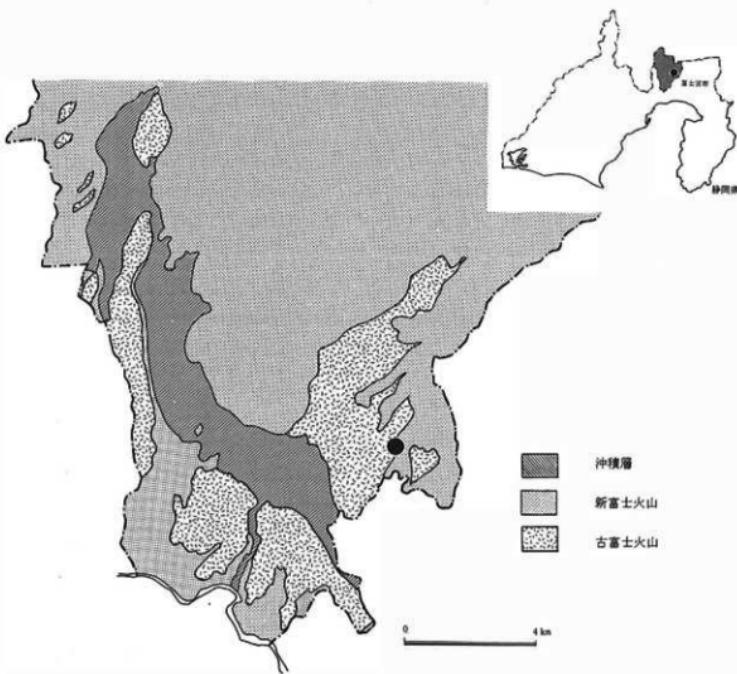
第1表 周辺遺跡一覧表	4
第2表 調査工程表	7
第3表 遺物観察表	20

写 真 図 版

図版1 調査区遠景	2
図版2 土坑	3
図版3 本調査出土遺物①	4
図版4 本調査出土遺物②	5
図版5 本調査出土遺物③	6
図版6 確認調査出土遺物	7

第Ⅰ章 はじめに

富士宮市の南西部に位置する杉田地区周辺には縄文早期から継続的な遺跡が営まれている（第1図）。この地域周辺に築かれた縄文遺跡は49遺跡に上り、その中には縄文早期の集落跡として話題となった若宮遺跡が立地するなど富士宮市内の中でも有数な遺跡分布地域である。本報告書に記載する丸塚遺跡はこの地域に立地する遺跡である。遺跡の存在は、過去に行われた富士宮市内における分布調査で得られた表探資料から明らかにされ、遺跡の性格は表探資料より縄文中期に小規模的に営まれた遺跡であると考えられている。今回の調査が本遺跡での本格的な発掘調査である。



第1図 富士宮市地質概略図（富士宮市の自然1988より引用、加筆）

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境（第1図）

富士宮市は、東経 $138^{\circ} 37' 17''$ 、北緯 $35^{\circ} 13' 20''$ の富士山南西麓に位置する。東西19.5km、南北が29.0kmと南北に細長い形をしており、総面積は、 314.81 km^2 である。

富士宮市は背後に聳え立つ富士山の形成過程による地形を基盤としている。その為、古くから人々は富士山の多くの自然の恵みや自然の恐怖を与えられてきた。

現在の富士山は、3層構造から形成された成層火山である。その構造は、基底部に小御岳火山、その上を古富士火山、そして新富士火山が覆っている。小御岳火山は約40～80万年前に噴出した標高2400m前後の大きな円錐形の成層火山である。古富士火山は8万年前～1万年前まで活動し、古富士火山から流れ出た溶岩は不透水性という特徴を持っている。そして、新富士火山は1万年前～3000年前の活動し、現在目にする標高3776mの富士山を形成する。

上記のような火山活動の仮定によって形成された富士宮市の地形は、上空より見た状況から大きく富士山区域、天守山地区域、羽駒・白尾・明星丘陵区域、また、この三区域との接合点を流れる芝川、潤井川の河川活動によってつくられた沖積地に分けることができる。小泉・杉田地区に立地している本遺跡は、この4区域のうち富士山区域に相当し、西側に慈眼寺沢、東側に天間沢との間に挟まれた標高180～210mを測る丘陵上の比較的緩やかな斜面上に位置する。この地域の基盤層は古富士火山が噴出した古富士泥流熔岩であり、新富士火山である大湖溶岩流がその上に被さっている。不透水性の特徴を持つ古富士泥流とそれの上に被さる透水性の新富士火山の境界面が地下水脈層となっている。この地域はその地下水脈付近まで浸食されているため、湧水地として古くから水に恵まれている。また、小丘・小谷を連続させた地形的条件などを含め、さまざまな面から生活環境に比較的恵まれていることがこの地区一体が遺跡密集地帯となる要因である。

第2節 歴史的環境（第2図）

現在、富士宮市には200程の遺跡が確認されている。縄文時代の性格を持つ遺跡は104に上り、縄文中期～後期を主体とする遺跡が数多い。富士宮市の遺跡分布の特徴として、古富士泥流層を基盤とする場所の上に立地していることが挙げられる。本遺跡が位置する杉田地区も同様の立地環境であることから、縄文時代から綿々と遺跡が築かれている。この地区に人の痕跡が見られるのは、若宮遺跡から出土した縄文時代草創期後半に位置付けられる表裏縄文土器、有舌尖頭器や上石敷遺跡から有舌尖頭器が採集されていることなどを踏まえると、早期の比較的早い段階だと考えられる。しかし、早い段階に形成されたと考えられる証拠を得ることができない以上、若宮遺跡（43）、代官屋敷遺跡（40）における集落跡、石敷遺跡おける早期の竪穴住居址、土壙墓群の検出から縄文時代早期前半より本格的な人間活動が始まったと考えられる。

縄文時代前期になると遺跡は広がりを見せる。代表的な遺跡を挙げると峯石遺跡（19）、箕輪B遺跡（17）、出水遺跡（24）などである。清水ノ上式土器が顕著に出土した峯石遺跡（19）では縄文前期の竪穴住居、箕輪B遺跡（17）では清水ノ上式土器を有する竪穴住居址、集石土坑や落しづ、出水遺跡（24）では、前期初頭の木島式土器が採集されている。小泉地区に限った事ではないが、前期に移り変わり比較的小規模な遺跡が増え始めるようである。

縄文時代中期～後期になると規模を持つ遺跡が広がり、その数も飛躍的に増加する。これは全国的にみても同様の傾向を示し、その原因に縄文海進、つまり長い期間続いた冷涼期から温暖期のピークに達し、人間行動がより活発となり人口増加に繋がった結果だと考えられている。本遺跡周辺の代表的な遺跡では、上石敷遺跡（37）、大室遺跡（21）、箕輪A遺跡（16）神祖遺跡（23）である。五領ヶ台式、鷹島式・北裏C 1式、曾利1式が出土した上石敷遺跡（37）、代官屋敷遺跡（40）からはこの時期の竪穴住居址が検出され、加曾利E式を主体とする大室遺跡（21）や勝坂3式～曾利V式、堀之内I式土器を主体とする箕輪A遺跡（16）また、箕輪B遺跡（17）神祖遺跡（23）などの遺跡より中期～後期前半にかけての土器が豊富に出土している。

縄文時代後期後半～晩期になると一転して遺跡の数は激減するようで、この時期の遺跡として辰野遺跡が挙げられるのみである。縄文時代後期後半～晩期の土器、石器以外に遺構の検出はされておらず、本地域の縄文時代はここで終末するようである。

本遺跡の北側には縄文時代中期の田上原遺跡、東側に、早・中・後期の焼烟遺跡、縄文時代前～後期の滝ノ上遺跡、縄文時代中・後期の杉田中村遺跡、縄文時代前・中期の寺地遺跡といった滝ノ上遺跡群があり、西側には縄文時代早～後期の新梨遺跡、南側には縄文時代中期の大宝坊遺跡などの縄文時代を主体とする遺跡に四方を囲まれている。また、慈眼寺沢を挟んだ場所には縄文中期の大辻遺跡、早・中期の杉田西原遺跡、さらに慈眼寺沢を300m程南下したところには、縄文早期の集落跡である若宮遺跡、縄文時代早・前期の代官屋敷遺跡といった若宮遺跡群が築かれる。市外に目を向けても、若宮遺跡の南側にはジンゲン沢遺跡、天間沢遺跡が築かれている。

このように見ても本遺跡周辺には縄文時代を通して長い期間遺跡が営まれていたことが窺え、その繁がりも注目される。

第3節 層序（第3回）

富士山西南部にあたるこの地域周辺の土層は、基盤となる古富士集塊泥流岩盤層上に、新富士火山から噴出したテラフが堆積して形成されている。

近年の積極的な土地開発の影響から、調査区の標高が高い部分ではローム上面付近まで削平がされ、遺物包含層は僅かに残されている程度であった。また、標高が低い場所では、調査前まで畑地であったことから15Tの一部を除くほとんどの部分についてマサ抜きが行われ、大沢スコリア層より下層のクロボク相当の層まで手が及んでいた。現地形は比較的緩やかな傾斜を持ち、一部ではこの地域の基本的な土層堆積がみられる。しかし、本調査区の旧地形は入り組んだ谷地形であり、縄文時代前期～中期にかけての栗色土層に相当する層より、縄文早期後葉の土器が出土している。このような状況から本調査区の土層は上方より二次的に堆積したものと想定される。

調査区の北側にあたる1T～5Tの北壁東西方向、調査区の西側にあたる15Tの西壁南北方向の土層の堆積状況について観察した。層序は7層に大別できる。土層の色調や含有物などからさらに細分化した。

A層（耕作土）

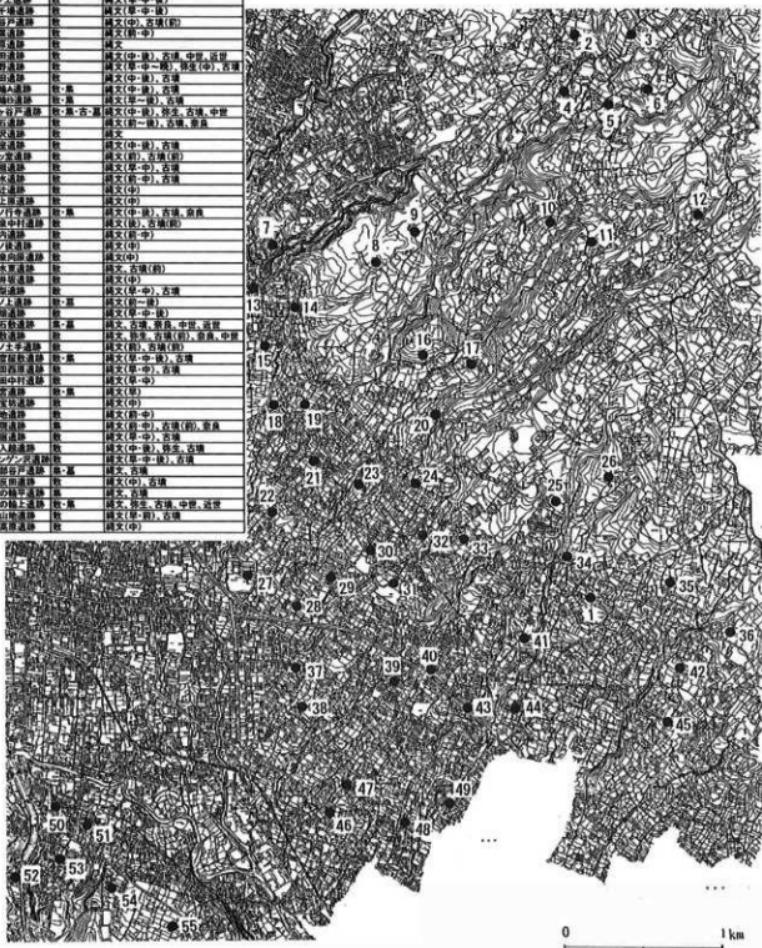
調査以前に耕作が行われていた層であり、調査区全域に広がる。層厚は25cm前後である。

B層（大沢スコリア）

弥生時代以降の遺構確認面とされている。スコリアの含有量と色調の違いなどからB i層、B ii層の2層に細分される。厚さは10cm前後である。15Tの一部分のみ確認された。

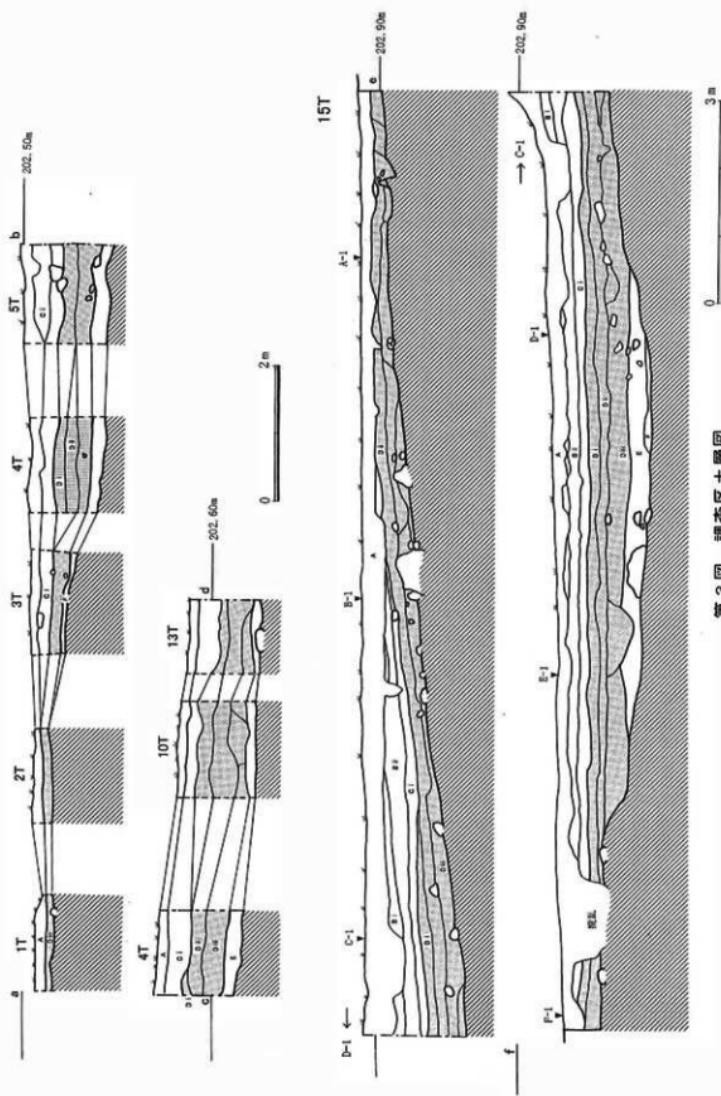
第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	丸塚遺跡	古墳	縄文(早・中)
2	中村戸戸遺跡	古墳	縄文
3	中村戸戸遺跡	古墳	縄文(中)
4	中村戸戸遺跡	古墳	縄文
5	中村戸戸遺跡	古墳	縄文
6	中村戸戸遺跡	古墳	縄文(中)
7	柳ヶ戸戸遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳
8	上原遺跡	古墳	縄文(終・中)
9	上原遺跡	古墳	縄文(終・中)
10	美谷戸戸遺跡	古墳	縄文(中)、古墳(終)
11	紀葉遺跡	古墳	縄文(終・中)
12	石原遺跡	古墳	縄文
13	吉田御所遺跡	古墳	縄文(終・中)、石器、中世
14	吉田御所遺跡	古墳	縄文(終・中)、新石器(中)、古墳
15	吉田御所遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳
16	吉田御所遺跡	古墳	縄文(中)、古墳
17	吉田御所遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳
18	柳ヶ戸戸遺跡	古墳(古・終)、石器(終・中)、古墳、中世	縄文(終・古)、古墳(古・終)、石器(終・中)、古墳、中世
19	柳ヶ戸戸遺跡	古墳	縄文(終・古)、古墳、中世
20	大沢遺跡	古墳	縄文
21	大室遺跡	古墳	縄文(中・終)、古墳
22	三ツヶ戸遺跡	古墳	縄文(終)、古墳(終)
23	津屋遺跡	古墳	縄文(中・終)、古墳
24	津屋遺跡	古墳	縄文(中・終)、古墳
25	大沢遺跡	古墳	縄文(中)
26	相ノ原遺跡	古墳	縄文(中)
27	生ノ口今遺跡	古墳	縄文(中・終)、古墳、中世
28	小森内山遺跡	古墳	縄文(中)、古墳(終)
29	小森内山遺跡	古墳	縄文(中)
30	小森内山遺跡	古墳	縄文(中)
31	小森内山遺跡	古墳	縄文(中)
32	水原遺跡	古墳	縄文、古墳(約)
33	水原遺跡	古墳	縄文(約)
34	水原遺跡	古墳	縄文(約)、古墳
35	ノゾミ遺跡	古墳	縄文(終・古)
36	佐伯遺跡	古墳	縄文(終・中)
37	石野遺跡	古墳	縄文、古墳、新石器、中世、近世
38	上原遺跡	古墳	縄文(終・中)、新石器(終)、古墳、中世
39	ノリナ遺跡	古墳	縄文(終)、古墳
40	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳
41	松田西遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳
42	松田中遺跡	古墳	縄文(終・中)
43	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終・中)
44	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終)
45	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終・中)
46	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終・中)、古墳(終)、中世
47	吉曾尾遺跡	古墳	縄文(終・中)
48	入船遺跡	古墳	縄文(終・中)、新石器、古墳
49	ジブリノヤマ遺跡	古墳	縄文(終・中)
50	志部舟木遺跡	古墳	縄文、古墳
51	志皮南遺跡	古墳	縄文(中)、古墳
52	志皮の橋遺跡	古墳	縄文、古墳
53	志皮の橋二塚	古墳	縄文、古墳、石器、中世、近世
54	志皮の橋二塚	古墳	縄文、古墳
55	志皮北遺跡	古墳	縄文(中)



第2図 丸塚遺跡と周辺遺跡

第3図 調査区土層図



B i 黒褐色土である。スコリア粒は10%含まれる。B iiよりもしまりが弱い。

B ii 橙色である。スコリア粒は30%含まれる。B iよりもしまりは強い。

C層（クロボク相当）

C層はクロボク層に相当する。土層の色調と含有物の違いによってC i、C iiの2層に細分化される。

C i 黒褐色土である。スコリア粒（極小）が15%含まれる。また、小礫が含まれている。しまりは若干持ち、粘性は強い。

C ii 黒色土である。スコリア粒（極小）が5%含まれる。しまりはやや強く、粘性も強い。B層同様に、場所によって削平されている。

D層（栗色土層）

D層は遺物包含層である。土層の色調や含有物の違いによってD i、D ii、D iiiの3層に細分化することができる。

D i 黒褐色土 スコリア粒（小）が10%含まれる。しまり、粘性共にC層よりも強さが増す。

C層の色調の影響をやや受けている。

D ii にぶい黄褐色 D iよりもスコリア粒の径が小さくなるが、含有量はD iと変わらない。この層より色調が若干明るくなる。

D iii にぶい黄褐色 スコリア粒は1%含まれる。しまりは若干弱いが、粘性は強い。

E層（富士黒相当）

黒褐色土である。下層の影響を受け、スコリア粒が増す。スコリア粒（極小～小）は2～5%含む。粘性、しまりはD ii i層に似ている。

F層（ローム漸移層）

黄褐色土である。F層の色調に類似するが、スコリア粒（小～大）の含有量が10%と増す。しまりは強く、粘性も強い。この層はローム層及び古富士泥流起源の礫が露出する層である。調査区北西側では表土直下に古富士泥流起源の礫が露出する。

G層（ローム層）

黄橙色である。スコリア粒（小～中）は30%含まれる。しまりは強く、粘性も強い。古富士泥流起源の拳大ほどの礫や巨礫などが含まれる。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の経緯（第2表・第4図）

平成18年7月20日付けで静岡県東部農業共済組合より静岡県東部農業共済組合事務所建設設計画に伴う文化財所在の有無についての照会を富士宮市教育委員会教育長宛に受けた。照会地は、埋蔵文化財包蔵地の丸塚遺跡範囲の境界部に当たり、隣接する下段では、すでに前年度に調査を行い、埋蔵文化財の包蔵が確認されていた（注）。このことを踏まえ、埋蔵文化財確認調査として平成18年9月25日～平成18年10月3日にかけて、埋蔵文化財の有無と遺跡の種別・年代の設定・遺物包含層までの深度などの情報を得る目的から開発範囲の約930m²のうち18m²を対象として実施した。その結果、照会地全城に遺物包含層が確認された為、その旨を静岡県東部農業共済組合に回答した。

その後、静岡県東部農業共済組合との協議を重ね、今回の計画を行うに際して現状維持は困難であるとの結論に達したため、静岡県教育委員会文化課にこの旨を報告した。静岡県教育委員会文化課より、今回の調査は建物基礎部分及び調査区西側の約100m²に対して本調査対象とし、残りの部分に関しては立会調査を行うように指導を受け、準備が整い次第調査を早急に開始した。本調査終了後、本開発事業者である静岡県東部農業共済組合の協力を得て立会い調査を実施した。このような経緯を経て報告書の刊行までの一連作業を富士宮市教育委員会文化課で行った。

注 前年度調査した際の報告書は今年度には発行予定である。

第2表 調査工程表

	平成18年				平成19年度					
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
確認調査（約18m ² ）	—	—								
本調査（約100m ² ）			—	—						
立ち会い調査						—	—	—	—	
整理作業						—	—	—	—	

— 実質期間

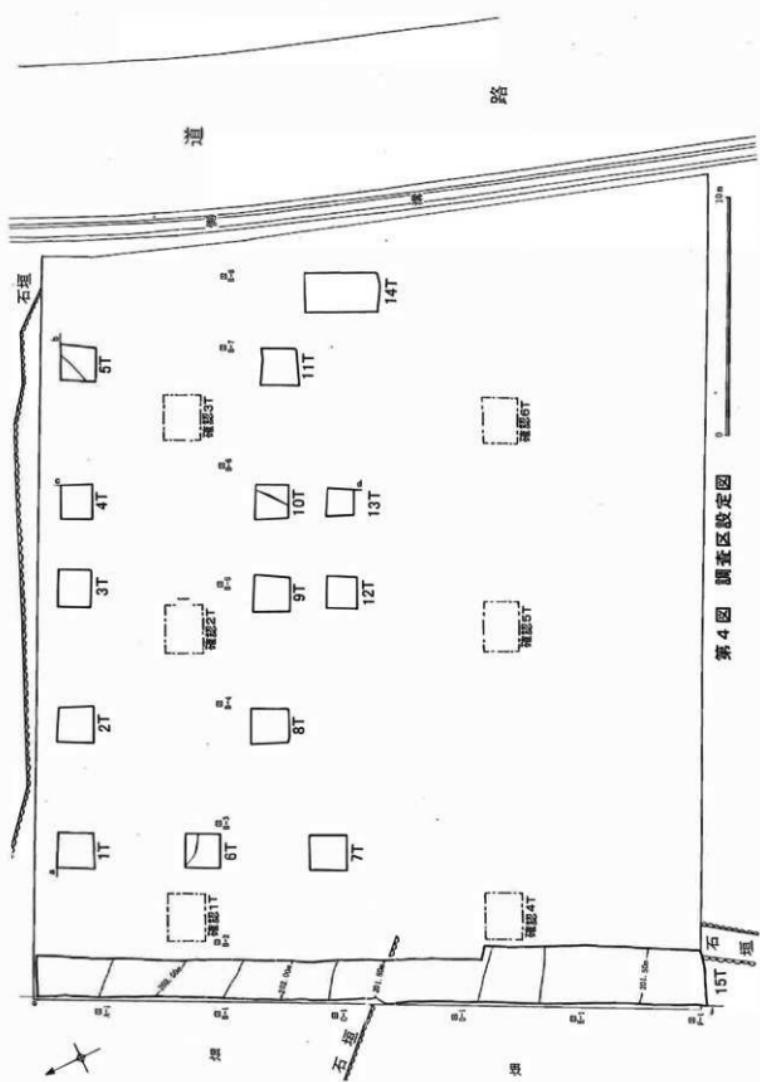
— 準備期間

第2節 遺構（第5図・第6図）

遺構はすべて15トレンチ北側より検出される。検出された遺構は土坑が4基、ピットが1基である。遺構の規模は小さく、すべての遺構の上部構造はすでに削平されてしまっている為に、正確な規模を求めるることはできない。ここでは、検出された面での規模を記載している。

土坑（第5図）

土坑は15トレンチから4基まとめて検出された。すべての土坑の基底部はローム面まで掘り込まれている。2・3・4号土坑の一部分が重なり合って検出されている。4基ともに底部には三角状の堆積が確認でき、その上に黒褐色土がレンズ状堆積する。遺物は2号土坑から1点確認されているのみであり、土坑の正確な年代を決定するまでの根拠を得ることはできなかった。



第4回 調査区設定図

1号土坑

調査区内では土坑のほぼ半部が検出された。検出できた形状から1号土坑の平面形は長軸方向に長細い精円形を呈する。規模は壁面より長軸0.65m、短軸0.4m、深さ0.08mを測る。遺物の出土はみられない。

2号土坑

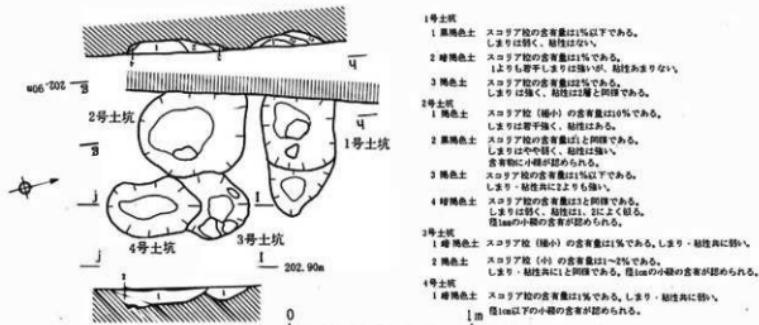
2号土坑の一部は調査区外であるが、平面形は精円形を呈す。また3・4号土坑が2号土坑を切っている。このような状況から2号土坑は3・4号土坑よりも古いと考えられる。土坑2の規模は、長軸0.59m、短軸0.49、深さ0.07を測る。底部には古富士泥流起源の礫がみられる。出土遺物は、褐色土層より17が1点出土している。17は、胎土等から東海系の縄文時代早期後葉のものであると考えられる。

3号土坑

3号土坑の一部は4号土坑に切られているために、正確な平面形はわからないが、2号土坑に近い形状をしていたものと考えられる。規模は長軸0.36m、短軸0.25m、深さは0.1mである。底部には古富士泥流起源の粗大の礫がみられるのみであり、遺物の出土はみられない。

4号土坑

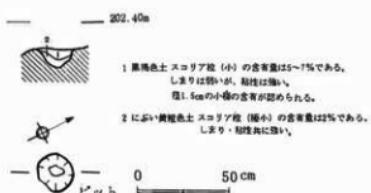
長軸方向に長い精円形を呈する。規模は長軸0.55m、短軸0.32m、深さ0.08mである。遺物の出土はみられず、複土中の土層区分はできない。



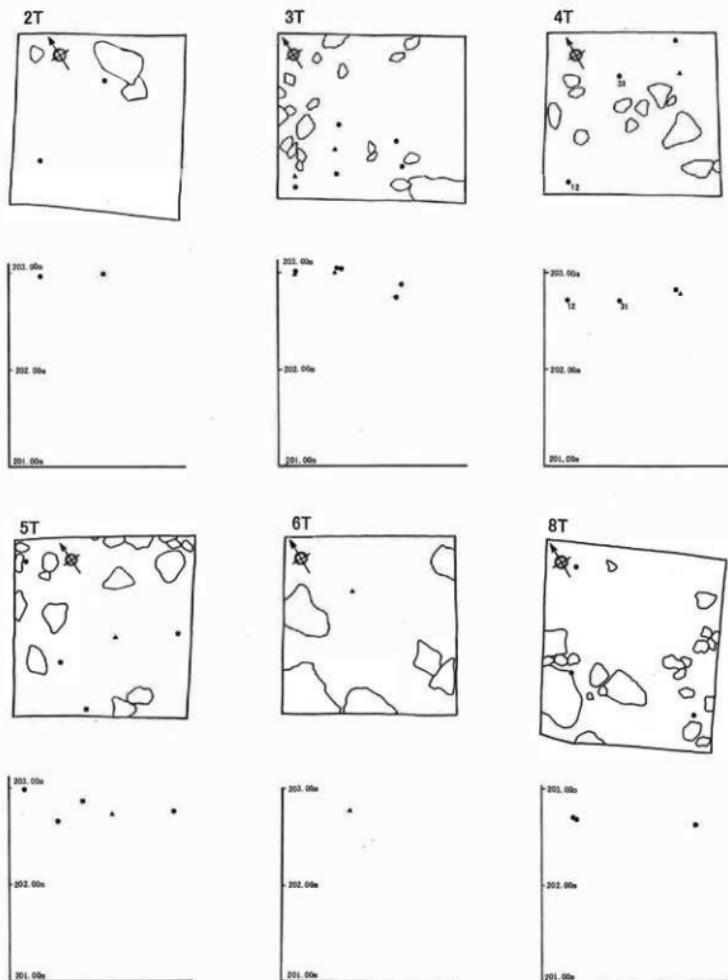
第5図 土 坑

ピット(第6図)

平面形はほぼ円形呈し、規模は長軸0.2m、短軸0.2m、深さ0.1mを測る小規模なピットである。遺物はみられず、その性格・年代とともに不明である。

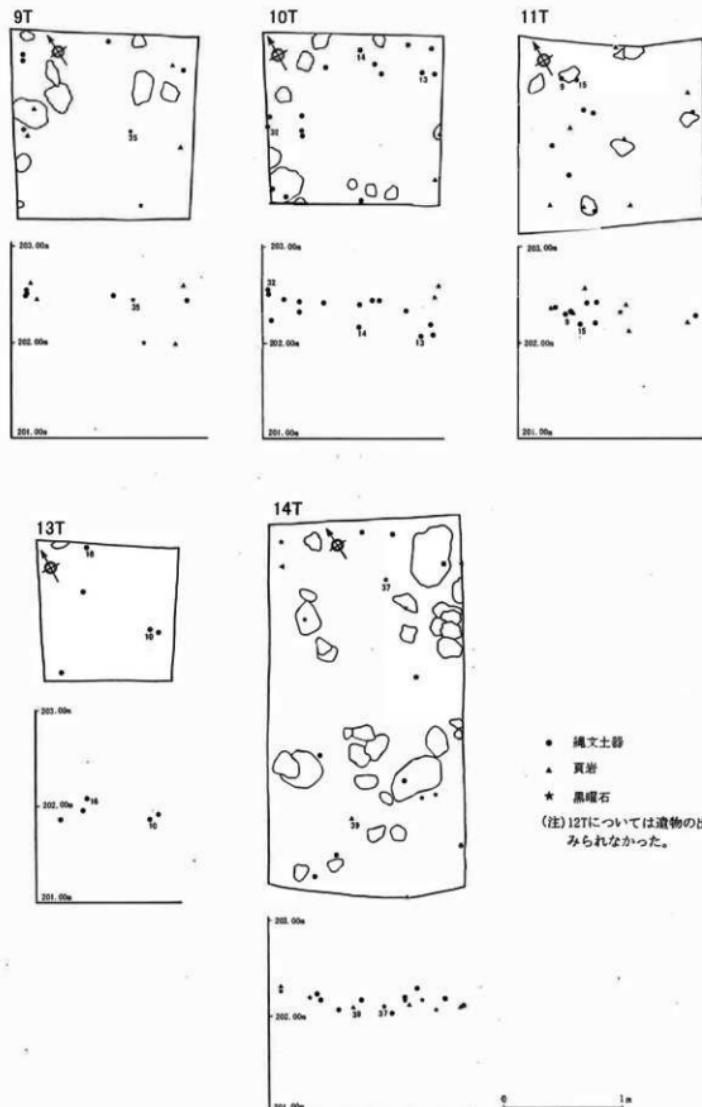


第6図 ピット

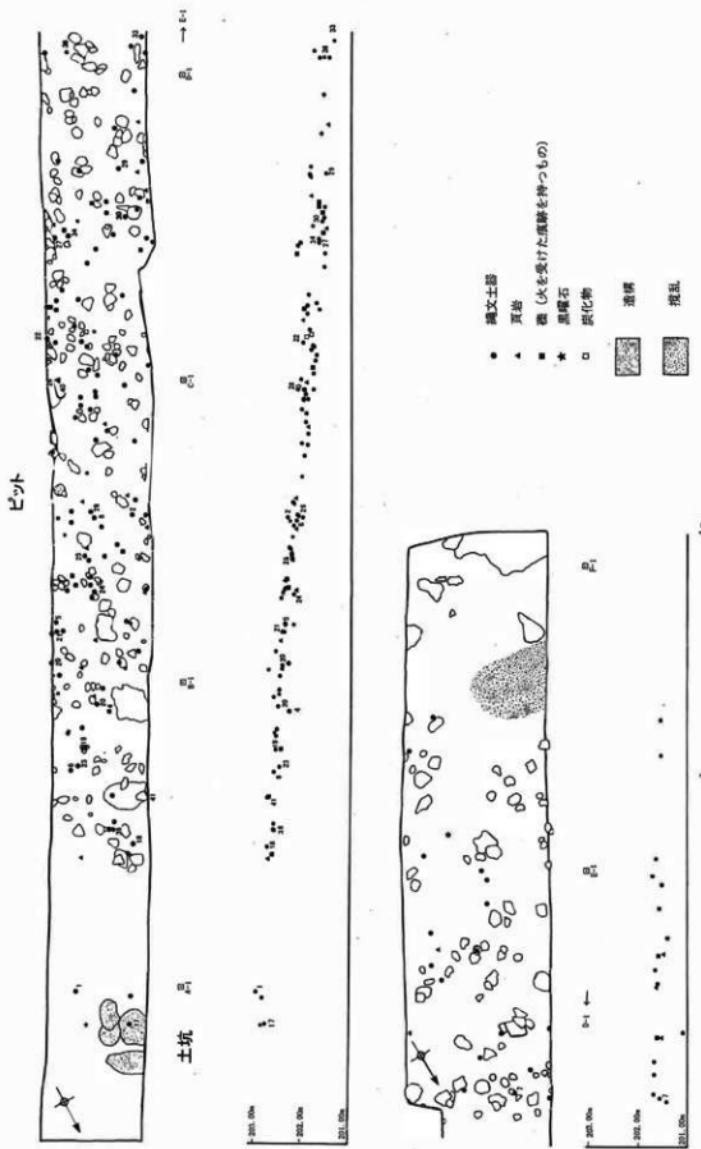


- 織文土器
 - ▲ 貝岩
 - ★ 黒曜石
- (注) 1T・7Tについては遺物の出土はみられなかった。

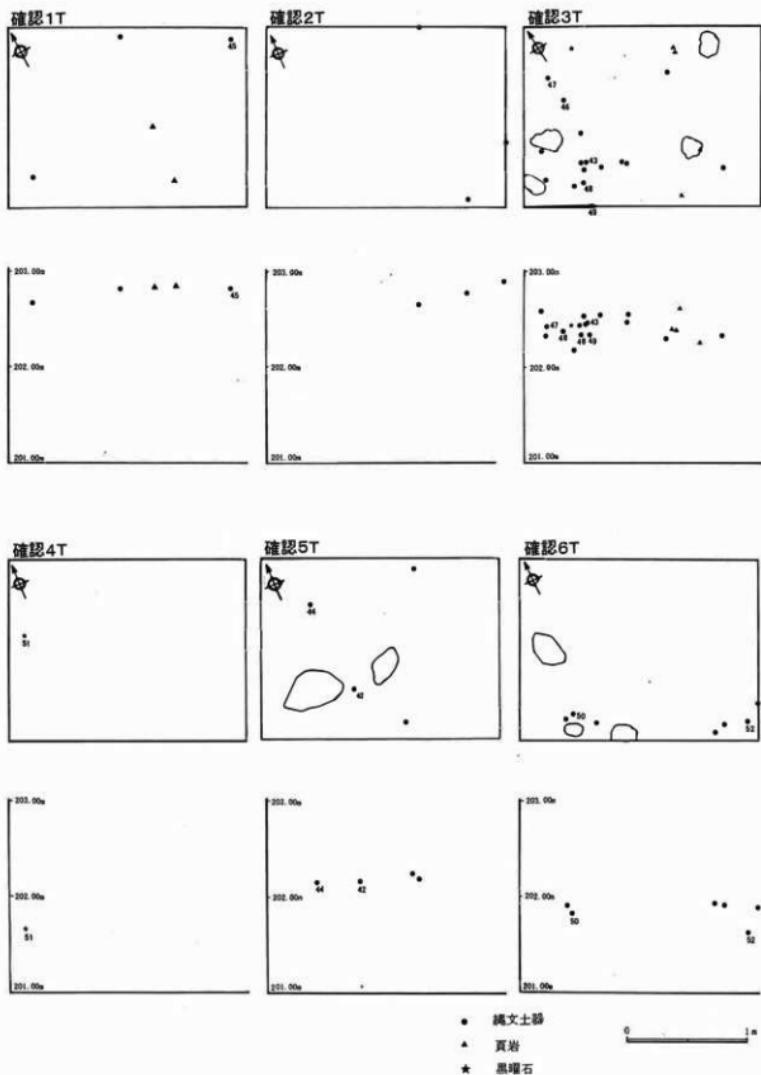
第7図 2~8T遺物出土状況図



第8図 9~14T 遺物出土状況図



第9圖 15T遺物出土狀況圖



第10図 確認調査遺物出土状況図

第3節 遺 物

確認調査及び本調査より出土した遺物総数は200点である。内訳は縄文土器140点、陶磁器17点、黒曜石12点、貝殻等31点である。以下ではトレンチごとに、また土坑（1号土坑）より出土した遺物に關しても出土区内で一括して報告する。

【本調査】

a) 縄文土器 第11図1~20, 第12図21~34

本調査の縄文土器は105点であり、すべて内外面のどちらかまたは両面に貝殻状条痕を持つものであった。胎土の混入物や条痕を多用していることから本調査で得られた土器はすべて縄文早期後葉の東海系条痕土器と考えられる。東海地方縄文早期後葉の土器を1群・縄文早期後葉～前半の土器を2群とし、口縁部や隆帯の施文より上ノ山式土器、入海1式土器、粕烟系土器、縄文早期後葉の土器、縄文早期後葉～前期の土器の分類とした。形式が判明している粕烟式・上ノ山式・入海式の特徴については以下の通りである。

①粕烟式土器 愛知県の粕烟貝塚を標識遺跡とした縄文時代早期後葉の土器形式である。胎土に纖維を多く含み、器厚は1cmほどのものを厚手とし、6~7mmの薄手なものがある。口縁部は波状をしており、酒杯や皿・長楕円形をした突器がつく。また、口縁部の外面には2ないし3条の粗い爪形文が巡らされている。

②上ノ山式土器 愛知県の上ノ山貝塚を標識遺跡とした東海地方縄文時代早期後葉の土器形式である。掠痕を残した深鉢が主体であり、口縁に1条の隆帯をめぐらせ、その上と口縁に棒状工具または指頭によって連続の交互押捺文が施される特徴を持つ。

③入海式土器 愛知県の入海貝塚を標識遺跡とした東海地方縄文時代早期後葉の土器形式である。一般に入海式土器は1式、2式に分類されている。1式は底部尖底である。入海式も上ノ山式土器と隆帯を持つが、入海式土器は螺旋状に数段にわたりめぐらすようである。隆帯上には範等によって連続の刻みが施されるものや棒状施文具による連続刺突が施される。

第1群 東海地方縄文時代早期後葉の土器群

第1群1類（粕烟式？）第11図1~3

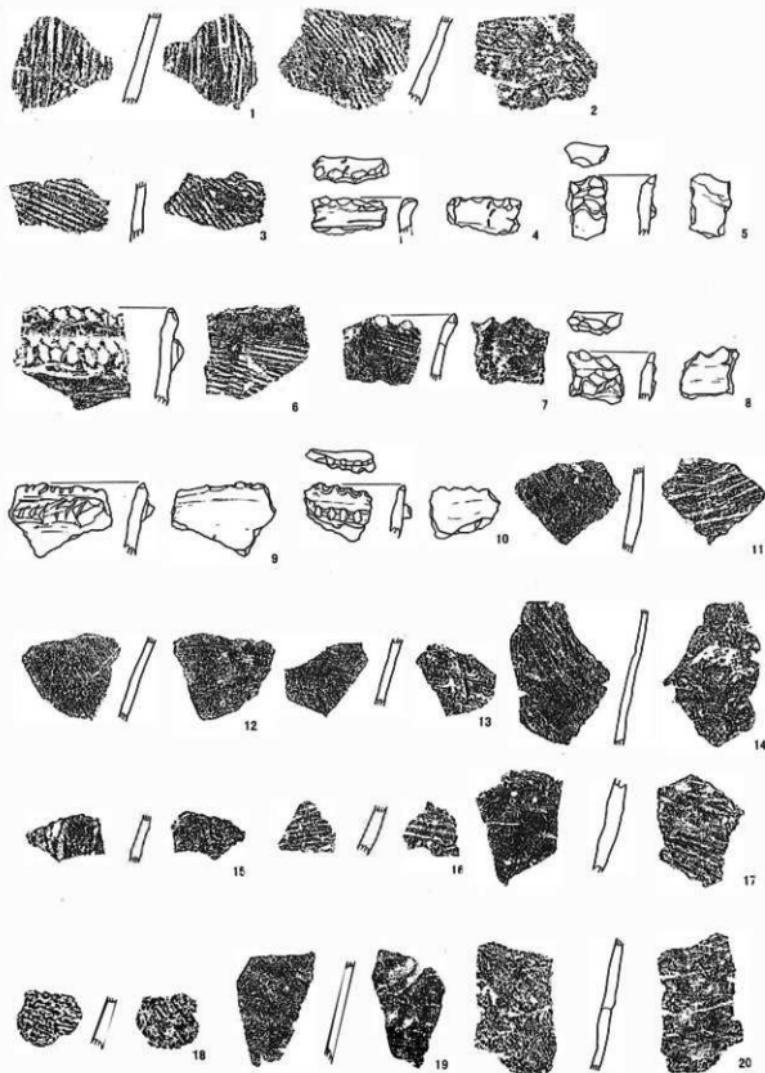
本調査では3点が胎土の特徴や調整痕よりそれに該当すると考えられるが、決め手となる隆帯及び口縁部を持たない破片資料であることから断定することはできない。その為、ここでは粕烟系土器として報告する。1~3は15Tより出土している。1、3は外面上に強い貝殻状条痕、2は外面上に貝殻状条痕が認められる。2の内面は磨耗して内面の調整をみることができないがおそらく、外面上に強い貝殻状条痕が施されていたと考えられる。

第1群2類（上ノ山式）第11図4~8

4は10T、5は13T、6・7・8は15Tより出土した。

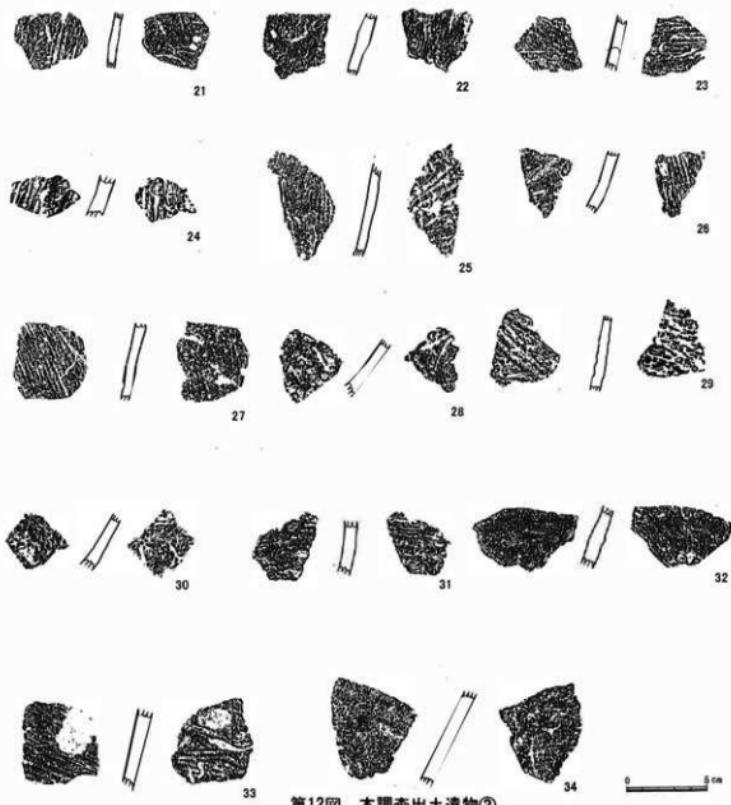
4は口縁部のみが残存する。口縁部には連続に交互押捺がなされている。5は口縁部と低い隆帯が残存する。口縁部、隆帯上には連続交互押捺がなされている。6は口縁部の破片の中ではもっとも大きいものである。口縁部と低い一条の隆帯が残存する。口縁部と隆帯上に交互押捺がみられる。内面には右上から左下に向かって強い条痕が認められる。

7は口縁部と一条の低い隆帯が残存する。口縁部と隆帯上には交互押捺が認められる。



第11図 本調査出土遺物①

— 5cm —



第12図 本調査出土遺物②

第1群3類（入海式）第1 1 図9・10

9は11T、10は13Tから出土している。2点共に入海1式土器である。

9は口縁部と若干高さを持つ隆帯が残存する。口縁部、隆帯上には範状工具による粗い刻みが認められる。隆帯を貼り付けたための押さえ痕が見られる。10は口縁部と若干高さを持つ隆帯が残存する。口縁部、隆帯上に単体の棒状施文具による押圧がみられる。

第1群4類（縄文早期後葉の土器）第1 1 図11～20、第1 2 図21～30

胎土の混入物や器面調整から上ノ山式土器・入海式土器同様の東海地方縄文早期後葉のものと考えられるものを4類とした。

11は2T、12は4T、13・14は10T、15は11T、16は13T、17～30は15Tより出土した。11・26は内面に強い貝殻状条痕、12～15は外面上に擦痕、16・24・29は内外面共に強い貝殻状条痕、17・20・25・27は外面上に擦痕、内面上に貝殻状条痕、18・21は外面上に貝殻状条痕、23は内面上に貝殻状条痕がみられるが、19、22、30は調整がみられなかった。



35

36



37

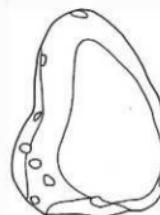
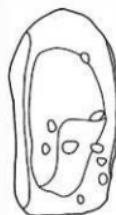
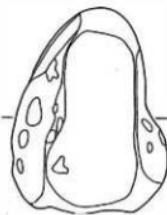
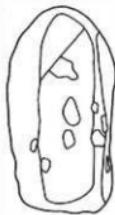
38

0 2 cm

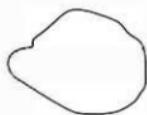


39

40



41



0 5 cm

第13図 本調査出土遺物③

第2群1類（縄文早期後葉～前期の土器）第1・2図31～34

縄文時代早期後葉の土器の胎土とは若干異なり黒色粒子の混入が比較的に多くなる。また、器壁の厚みが増すものを早期後葉～前期の土器とした。31～34はすべて同一個体と考えられる。31は内面に、34は外外面に擦痕が認められ、32・34には認められなかった。

b) 石器

石鏸 第1・3図35・36

石鏸は9・15Tから各1点ずつ出土している。石材の特徴より共に信州系の黒曜石と考えられる。35は9Tから出土している。長さ(1.1cm)、巾1.4cm、厚さ0.4cmを測る。基部に抉入が僅かに認められる凹基無基鏸である。胴部のみ残存しており、三角形の頂点がすべて欠損している。全体の加工調整は細かいが比較的に粗雑感を受ける。36は15Tから出土している。長さ1.8cm、巾1.2cm、厚さ0.3cmを測る。基部に抉入が全体の1/9程度みられる凹基無基鏸である。全面に丁寧な調整がなされている。本調査の中では唯一完形で出土した石鏸である。

加工調整痕ありの剥片 第1・3図37・38

加工調整痕のある剥片は14・15Tより各1点ずつ出土している。使用用途が不明であるためにここでは加工調整痕ありの剥片と報告する。石材は石鏸同様に信州系の黒曜石である。37は14Tから出土している。長さ(2.9cm)、巾(1.95cm)、厚さ0.4cmを測るが、上・下端部が欠損する。左側面の内外共に加工調整がわずかに見られる。38は15Tから出土している。長さ2.3cm、巾0.8センチ、厚さ0.3cmを測る。右側面に刃部を作り出した感を受ける。ただし、細かな調整はみられない。

横刃形石器 第1・3図39

横刃形石器(39)は14Tより1点出土している。長さ(3.3cm)、巾(4.2cm)、厚さ0.7cmを測る。下端部に丁寧な加工調整がなされており刃部を作り出している。上端部、両側面は欠損している。石材は砂岩である。

剥片 第1・3図40

剥片は数多く検出されたが、その中でも比較的に残りが良い剥片を1点報告する。40は15Tから出土されたものである。石器作成の際に母岩から剥離したものである。石材は砂岩である。

磨石 第1・3図41

磨石は15Tから1点出土している。長さ12.5cm、巾8.6cm、厚さ6.5cm、重さ115gを測る。

石材は溶岩である。

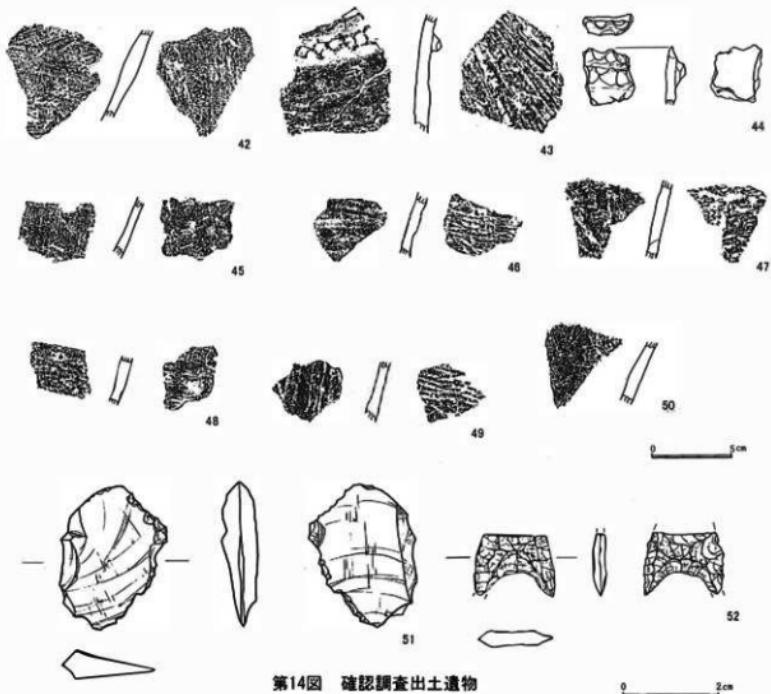
【確認調査】

a) 縄文土器 第1・4図42～50

確認調査では35点が出土している。確認調査は本調査に先駆けて行われた調査であり、確認調査の縄文土器もすべて内外面のどちらかまたは両面に貝殻状条痕を持つものであった。胎土の混入物や条痕を多用していることから本調査で得られた土器と同様に、縄文早期後葉の東海系条痕文土器と考えられる。ここでも、本調査と同様に分類するが、3類の入海式土器の出土はなかった。

第1群1類（粕烟式？）第1・4図42

42は20Tより出土している。内外面には条痕が認められる。隆帯及び口縁部の破片ではないために形式までは断定することはできないが、器壁の厚さや、壁面調整が粕烟土器に似ているため、ここでは粕烟系土器として報告する。



第14図 確認調査出土遺物

第1群2類（上ノ山式）第14図43・44

43は18T、44は20Tから出土している。共に上ノ山式土器である。

43は口縁部付近の破片であり、1条の比較的高さのある隆帯が残存する。隆帯上には交互押捺がなされ、内面には右下から左上に向かって貝殻状条痕が認められる。44は口縁部の破片であり、低い隆帯が認められる。口縁部、隆帯上には交互押捺がなされている。

第1群4類（縄文早期後葉の土器）第14図45～49

45は16T、46～49は18Tから出土している。46以外の内面には貝殻状条痕文が認められる。4類にあたるこれらの土器胎土中には石英、長石、金雲母、繊維が含まれている。

第1群5類（縄文早期後葉～前期の土器）第14図50

50は21Tより出土している。1～4類の土器の胎土とは若干異なり黒色粒子の混入が比較的に多くなる。また、器壁の厚みが増す。しかし内面に条痕が認められたため、50を早期後葉～前期の土器とした。

b) 石器 第14図51～52

調整痕のある剥片 第14図51

51は19Tより出土している。下端部の一部に調整痕が残された剥片である。上端部が欠損している。石材は黒曜石である。

出土位置		器形		尺寸(cm)		特征		年代	
层位	地层	上口尺寸	下口尺寸	高	腹深	底径	口沿	石料	断面
1	1	45	45	15.5	15.5	15.5	直口	青石	直口直底
2	2	52	52	17	17	17	直口	青石	直口直底
3	3	52	52	17	17	17	直口	青石	直口直底

表3 遺物觀察表

石鎌 第14図52

52は21Tより出土している。凹基無茎鎌であり、石鎌中央より上端部分にかけて欠損している。法量は、長さ（0.8cm）巾0.16cm、厚さ（0.25cm）である。下端部が残存しており、抉入部分が丁寧な調整によって作り出されていることが確認できる。石材は頁岩である。

第IV章 おわりに

今回の調査から縄文時代早期後葉を主体とした東海系の条痕文土器片の出土が顕著に見られた。また、遺構としては土坑4基、ピット1基の計5基が検出することができた。しかし、いずれも上部構造が削平されており、遺構の性格、年代ともに明らかにすることはできなかった。

当初、分布調査により九塚遺跡は、縄文中期の遺跡と考えられてきたが、今回の成果より縄文早期後葉には営まれていたと考えられる。本調査区の現地形は比較的に緩やかな丘陵であるが、旧地形はそれとは異なり、入組んだ谷地形であることが確認された。この谷地形に沿って上方より移動した土が二次堆積し、長い年月をかけて現在のような地形になったものと考えられる。市内において早期後葉の関東系条痕文土器の出土が認められているが、東海系条痕文土器の出土はあまり認識されていなかった。この九塚遺跡の発掘成果より、この地域にも東海系の条痕文を用いていた人が確実に足を踏み入れていたことが窺え、この時代の人の流れを考える上で、大きな成果であったといえる。

参考・引用文献

- | | |
|--------------------|---|
| 八幡一郎 | 1972 「淡尾平野の遺跡遺物」
『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究上』 |
| 富士宮市教育委員会 | 1982 『代官屋敷遺跡』
—西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）— |
| 静岡県 | 1990 『静岡県史 資料編1 考古一』 |
| 知多市教育委員会 | 1991 『二股貝塚』 |
| 静岡県 | 1992 『静岡県史 資料編3 考古三』 |
| 富士宮市教育委員会 | 1993 富士宮市の遺跡 —富士宮市遺跡詳細分布調査報告書— |
| 戸沢充則 | 1994 『縄文時代研究辞典』 |
| 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1994 『焼堀遺跡A地点』 —平成4・5年度東駿河湾環状道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書— |
| 富士宮市都市開発部水とみどりの課 | 1995 富士宮市の自然 第二富士宮市域自然調査研究報告書 |
| 富士宮市教育委員会 | 1995 富士山のなりたち |
| 富士宮市教育委員会 | 2000 『富士宮市遺跡地図 —第3版—』 |
| 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2005 『仁田館』 『来光川遺跡群』 —平成11～16年度一級河川来光川
河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |

報告書抄録

ふりがな	まるづかいせき						
書名	丸塚遺跡						
副書名	静岡県東部農業共済組合事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第37集						
編集者名	澤柳幸司						
編集機関	富士宮市教育委員会						
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地						
発行年月日	西暦2007年6月30日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地名	市町村	遺跡番号				調査原因
まるづかいせき 丸塚遺跡	しづかぎん 静岡県 ふじのくやし 富士宮市 すぎたあざ 杉田字 しななし 新梨	22207	市番号 5 県番号 114	138° 39' 22"	35° 13' 13"	平成18年 12月18日 ~ 平成19年 1月12日	約100m ² 静岡県東部 農業共済組合 事務所建設に 伴う埋蔵文化 財発掘調査 報告書
所収遺跡名	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物	特記事項
丸塚遺跡	散布地	縄文時代 早期後葉		土坑 ピット	縄文土器(上ノ 山式・入海式 等)石礫 加工痕のある剥片 剥片		

富士宮市文化財調査報告書 第37集

丸塚遺跡

平成19年6月30日

編集 富士宮市教育委員会
 発行 富士宮市教育委員会
 〒418-8601
 静岡県富士宮市弓沢町150番地
 (0544) 22-1111㈹
 印刷 三鷹美術印刷株式会社
 〒418-0056
 富士宮市西町1番15号
 (0544) 26-3636㈹

写真図版



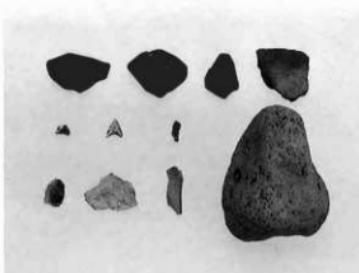
図版1 調査区遠景



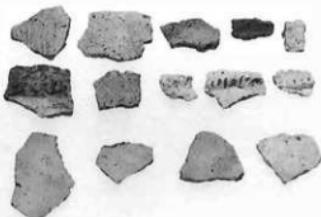
図版2 土坑



図版4 本調査出土遺物②



図版5 本調査出土遺物③



図版3 本調査出土遺物①



図版6 確認調査出土遺物